

# 難聴と認知症

ミルディス小児科耳鼻科

平野 浩二

「聞こえが悪いと認知症になると聞きまして、その予防で補聴器を使おうかと受診しました」——最近の患者さんの中には、認知症という言葉を出して受診理由を語る人が多い。認知症の理由はいろいろである。難聴を放っておくのはたしかに問題だと思う。早めに補聴器を使ってもらうのは悪いことではない。正確に言うならば、難聴が進むから認知症になるのではないと思う。難聴が進んで会話が減少するから認知症になるのだ。つまり、周囲の人との会話こそが頭を使うことになり、認知症予防に有効なのだ。

▶ もともと耳が聞こえず、手話を用いている聾者がいる。彼らは認知症になりづらい。それは音声言語ではなく、手話と言う視覚言語を用いて会話をするからだ。耳は聞こえなくても、手話による会話で頭は使っているのだ。手話を使うみんなに会うために、あちこち出歩く。自宅の中にじっとしているわけでもない。これも認知症予防に重要なのだろう。

▶ 日本人の補聴器使用は、欧米に比べると、10歳ぐらい遅い。欧米では聞こえないとすぐに補聴器を使うようだ。高齢者が補聴器をつけるのは当たり前だと理解されている。ところが日本では、補聴器を使うのはよくないことと思われ、最後の最後まで補聴器を使わずに頑張る。補聴器を使うようになったら、人生終わりだとすら思っている人もいる。テレビに出てくる俳優さんたちも、普段は補聴器を使っているけど、テレビにうつるときだけ補聴器をはずしたりする。若く見えることが重要なのだろう。

▶ 同居する家族の人が一生懸命大声で話しかけているので、声が聞き取れるのだ。高齢者本人に言わせれば、「私は耳がよく聞こえるので、補聴器をしなくても困らない」ということだ。実際に困っているのは、聞こえない本人ではなく、周囲の家族なのである。外出すれば家の外の人には大きな声では話してくれない。「みんなの音が小さすぎる」と帰宅してから文句を言いはじめる。はじめて受診してくる患者さんに「老人性

難聴です。補聴器をつけましょう」と説明しても、なかなか納得してもらえない。当の本人は耳垢が詰まっているから聞こえないのだと思い込んでいる。医師の説明にうなづくのは、家族のほうなのだ。「一度自宅に帰って、補聴器が必要かどうか、よく話し合ってください」とひとまず自宅に持ち帰らせる。医師が補聴器が必要だといくら説明しても、かたくなに拒否するからだ。高齢者の頑固さもあり、時間をおいて徐々に理解してもらおうしかない。

外の人声は小さくて聞こえない。自宅には日中自分一人しかいない。話し相手もなく、ポツンと昼間をすごすようになる。このボーっとしている間に、認知症が進んでくる。特にパートナーが亡くなるとなおさらである。

▶ 重要なのは補聴器をすることではない。会話をすることである。そのためには、補聴器をつけて、会話をしにでかけよう。

東京都では、軽度の難聴であっても、補

聴器購入金額を助成する制度がかなり広まってきた。この制度を使えば高い補聴器が格安で手に入る。補聴器が高くて買えないというお年寄りのために作られた制度だ。健康で長生きするために、行政も力を入れているので、70歳になったらぜひ補聴器装用を検討しよう。

▶ 2025年9月、岩波新書から「難聴を生きる 音から隔てられて」という本が発売された。難聴で生きる人たちの苦しみが載っている。聞こえないということは、社会から孤立することであるようだ。音を聞き取ることが社会で生きていくためにはなによりも重要なことだからだ。

みんなが社会から取り残されないように、補聴器を使って自宅から社会に出ていこう。人生100年時代には、耳も頭も最後の最後まで使い切っていくしかない。70歳で補聴器を使い始めても、その後も30年間愛用していかなければならない。まだまだ先は長い。 (ひらの・こうじ=足立区)

補聴器購入費用の助成制度がある都内区市町村(2025年10月現在)

